

國學院大學學術情報リポジトリ

「スルトタン」から「シタトタン」への変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 曉琳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001616

「スルトタン」から「シタトタン」への変遷

The Change From “surutotan” to “shitatotan”

王 曉 琳

キーワード: 「トタン」 テンス・アスペクト 時間関係 歴史的変遷 コーパス

关键词: 「トタン」 时体 时间关系 历史演变 语料库

要旨

「トタン」は本来歌舞伎のト書き用語で、舞台の上で、二つ以上のことが同時に行なわれることを示す。明治時代になると、動詞に接続し、二つの動作の時間関係を表わす用法が現れた。前接する動詞のテンス・アスペクト形式はスルとシタが主であるが、シテイルとシテイタもまれに見られた。1920年代を境目に、「スルトタン」が徐々に減少した結果、「シタトタン」が唯一のパターンとなり、現代に至った。本稿では「スルトタン」と「シタトタン」の使用比率を統計し、変遷時期を確認する。「トタン」のみならず、「瞬間」と「アト（ノチ）」は同じように、スルとシタが前接する用法がある。「トタン」を研究したうえで、「瞬間」と「アト（ノチ）」の使用方法和用法変化を説明する。本稿では、青空文庫、現代日本語書き言葉均衡コーパスなどを利用して検索することにより、「トタン」また「瞬間」と「アト（ノチ）」の例文を分類し、前接する動詞と特徴を研究する。本稿は、「トタン」の用法を詳しく研究し、「トタン」は「スルトタン」から「シタトタン」への変化はいつのことなのか、そして「スルトタン」と「シタトタン」はどう異なるのかといった疑問は研究目的である。

摘要

「トタン」一词原本是在歌舞伎中使用的名词。到了明治时期，出现了「トタン」前接动词，表示两个动作之间的时间关系的用法。「トタン」前面接续的动词的时体形式主要是スル和シタ，但是也会出现シテイル和シテイタ两种情况。从1920至1930年，「スルトタン」的形式逐渐减少，最后「シタトタン」的形式成为「トタン」接在动词后面唯一的用法，这种用法一直延续到现在。本论文通过对语料库检索统计，描写「トタン」的历史演变。近代语料主要利用青空文庫，现代语料主要利用“现代日语书面语语料库(BCCWJ)”。

はじめに

一九二八年に刊行された『齋藤和英大辞典』の「トタン」の例文の中に、次のよ

うな例文がある。

(1) ドアをあけた途端に猫が家に飛び込んできた。

一九九三年に刊行された『プログレッシブ和英辞典 第二版』の「トタン」の例文の中に、次のような例文がある。

(2) 飛び出す途端に家が倒れました。

例(1)の場合はドアを開けたあと、すぐに猫が家に飛び込んできた。例(2)の場合は飛び出した後、すぐに家が倒れた。二つの例文が同じく動作の継起関係を表わすが、「トタン」に前接する動詞のテンス・アスペクトが違う。江戸時代から「スルトタン」が現れ、明治時代に「スルトタン」が徐々に減少して、「シタトタン」のパターンが出てきた。現代日本語において、「シタトタン」は唯一の形式となっている。時間的近接関係を表わす接続機能語として、この百年の隔たりに、「スルトタン」と「シタトタン」はどのような変遷を遂げたか。これは本稿の研究目的である。

本論文の構成は以下の通りである。第一章では、先行研究、研究目的と研究方法を紹介する。辞典の「トタン」の見出しに記された例文を詳しく分析して、「トタン」の用法を確認する。第二章では、コーパスで検索した結果に基づいて、「トタン」の用法をそれに前接する動詞の時間的意味によって分類する。調査資料としては、国立国語研究所が開発した「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」、そして「青空文庫」などを検索して、用例を分析する。「スルトタン」から「シタトタン」への変化を図表で示し、分析する。第三章では、まず時を表すほかの機能語「瞬間」と「のち(あと)」を比較し、「トタン」との異同を分析する。そして、「トタン」「思うと」「や否や」の使用頻度の変化と明治時代の小説作者の認可度を説明する。最後三者の例文を探して、共同点と相違点を分析する。

第一章 序論

1.1 辞典に記載される「トタン」の意味と例文

まず、辞典に記された例文を見る。

『日本国語大辞典』では、以下のような記述がある。

(2) ほんの短い時間の経過を表わす。ちょうどその瞬間。はずみ。ひょうし。おり。また、ある事柄があつて、直ちに続いて別の事柄が起こるさま。

- a. ぎゃうじおさへて、ただ今のは、とたん⁽¹⁾のわれにて、せうぶしれずと申ける（浄瑠璃・箱根山合戦（1660）初）
 - b. 「男も大力も此女性にぬらされてはみるがうちにとたんやっころり（浮草子・人倫糸屑（1688）妾揚）
 - c. マヲ ヨケル totan(トタン) ニ ドブニ ハマル(和英語林集成(初版)（1867）)
 - d. はしごをあわててかけおりるととたんへ伊賀はんが来なんしたから不図おもひだして（安愚楽鍋（1871-1872）〈仮名垣魯文〉二・上）
- (3) 歌舞伎のト書き用語。舞台の上で、二つ以上のことが同時に行なわれることを示す。
- a. 右とたんの立廻りよろしく有べし（歌舞伎・けいせい花絵合（1773）口明）
 - b. 片しゃぎりにて道具納る。とたん、つづみの一声になり（歌舞伎・名歌徳三舛玉垣（1801）四立）

以上の解釈によれば、「トタン」の語源は名詞であることが分かる。「トタン」はもともとほんの短い時間の経過を表わす歌舞伎のト書き用語である。

『齋藤和英大辞典』では、以下のような例文がある。

- (5) 家を出る途端にバツタリ人に逢った。
- (6) 飛び出す途端に家が倒れました。
- (7) 自動車を除ける途端に転んだ。
- (8) 梯段を駆け上がる途端に亡った。

『プログレッシブ和英中辞典』では、以下のような例文がある。

- (9) 彼が出て行った途端に彼女が帰ってきた。
- (10) 自転車を避けようとした途端に転んだ。
- (11) ドアをあけた途端に猫が家に飛び込んできた。

例(7)と例(10)はよく似ており、自転車を避けたすぐ後、転んだという意味を表わす。現代日本語において、シタを受け、前の動作や変化が起こるとすぐに、別の動作や変化を受け、前の動作や変化が起こるとすぐ後に、別の動作や変化が起こることを表わす（田島優2001）。(9)～(11)はそのような例文である。スルを受け、そのような用法はない。しかし、(5)～(8)は同じで、「トタン」の

(1) 明らかにするために、筆者が自分で「トタン」の下にアンダーラインを加える。

まえにスルである。「トタン」の前の動作が終わった瞬間、すぐ、はずみがゼロに（トタン）の後の動作が起こる。「トタン」に前接する動詞のアスペクト・テンスは、第二章で説明する。

1.2 先行研究

近世に「トタン」が浄瑠璃の台本に「とたんのひょうし」のような形で現れた。明治時代に時を表わす機能語としての使用方法になっている。田島優（2001）は「スルトタン」から「シタトタン」への変化時期を検討した。昭和初期と現代の間には、「トタン」の前に来る動詞の時制表示が異なっていた。この変化について、田島優は夏目漱石、横光利一と芥川龍之介の作品を対象にして、それぞれの作家の使用例を分析しながら、変化の原因も分析した。数多くの近代作家のうち、三人の作品だけを対象とするのでは、「トタン」の全面的な研究とは言いがたい。そして、三人の年齢的な差の問題も考えるべきだ。そして、芥川龍之介の作品の中に、時制表示としての「トタン」の例文は一つしかないのも、彼の作品の特徴とするのは不適切だと考えられる。その上、「トタン」の前にいつから「スルトタン」になっているのか言及していない。毛文偉（2010）コーパスの検索を通して、「トタン（に）」の各形態を検討し、機能辞の形態、機能辞度と使用頻度との相関関係を分析した。しかし、「とたん」「途端」「とたんに」「途端に」の四つに分けて研究しているが、文字表記の使い分けが文法的機能と関連がないので、その分け方に意義がないと思われる。

三次佑果（2016）は時間的近接関係を表す接続機能語としての「トタン」「瞬間」「すぐ（に）」「同時に」「まもなく」「やいなや」などを研究した。その中に「トタン」の語形はいろいろなパターンが存在しているので、「トタン」を中心に考察した。「トタン」の用法は、次のようである。①「に」が付属すると前件と後件での時間間隔が大きくなる。②「その」が付属すると前件と後件が、文脈的に直接関係するような用例が多い。③「～。とたんに」は前件と後件の関連性（因果関係）が希薄になり、後件での驚きやマイナスイメージが大きい。三次佑果が「スルトタン」を含めた「トタン」の基本的な表現のパターンをまとめたが、「スルとたん」の用法を分析しなかった。三次佑果が「トタン」の例文を整理し、「トタン」の用法を明らかに説明した。

以上の研究成果を踏まえて、本稿は、「トタン」は「スルトタン」から「シタトタ

ン」への変化はいつのことなのか、そして「スルトタン」と「シタトタン」はどう異なるのかといった疑問を念頭に置きつつ、この変遷現象を研究するものである。

第二章 「とたん」に前接する動詞のテンス・アスペクト

2.1 「スルトタン」と「シタトタン」の使用比率

表1は毛文偉(2009)が調査した「トタン(に)」の使用状況に基づいたものである。1.2で「とたん」「途端」「とたんに」「途端に」の四つに分け方に意義がないことをもう説明した。それで、ここで「とたん」と「途端」、「とたんに」と「途端に」をそれぞれ合わせて表示する。

表1 「トタン」の使用頻度

		1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990
とたん (途端)	スル	9 (31)	2 (10.5)	1 (20)	1 (4.2)	1 (2.6)	0	0	0	0	0
	シタ	1 (3.4)	1 (5.3)	0	9 (37.5)	17 (44.8)	10 (32.3)	41 (30.1)	66 (64.1)	67 (69.8)	110 (65.1)
とたん (途端) に	スル	16 (55.2)	12 (63.1)	3 (60)	2 (8.3)	2 (5.3)	1 (3.2)	2 (1.4)	1 (1.0)	0	0
	シタ	3 (10.3)	4 (21)	1 (20)	12 (50)	18 (47.1)	20 (64.5)	93 (68.4)	36 (35)	29 (30.2)	59 (34.9)
合計		29	19	5	24	38	31	136	103	96	169

表1の「スルトタン」と「シタトタン」の使用頻度を合計すると、表2になる。1920年以降、「スルトタン」の使用比率は減少していた。1980年から、「スルトタン」がなくなった。それに対して、「シタトタン」の使用比率は1920年からだんだん増えていた。1960年以降、基本的に「シタトタン」だけである。図1は1900年から1990年までの両者の変遷を示すものである。

表2 「スルトタン」と「シタトタン」の使用比率

	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990
スル	86.2	73.6	80	12.5	7.9	3.2	1.4	1.0	0	0
シタ	13.7	26.3	20	87.5	92.1	96.8	98.5	99.0	100	100

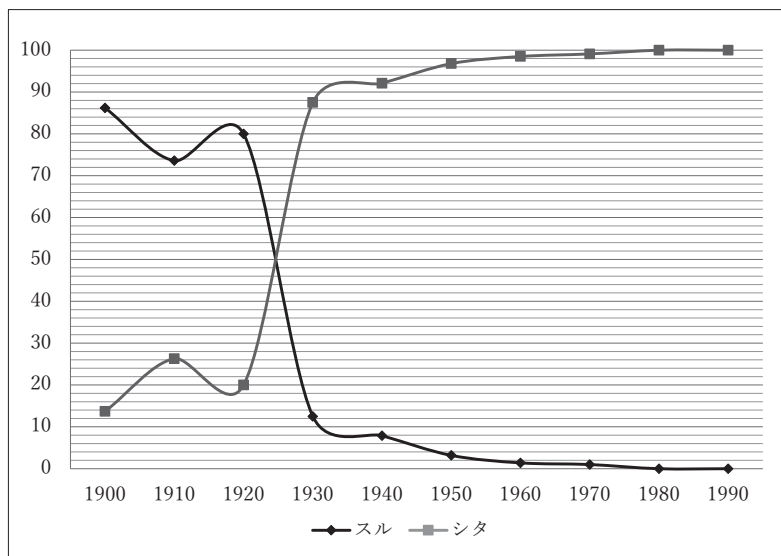


図1 「スルトタン」と「シタトタン」の変遷

2.2 スルトタン

「トタン」の前に初めて動詞が付き、時間的機能語として使われたのは、1890年から1899年まで、「スルトタン」の形式である。例(12)～例(14)は飛車が見つけた最初の例である。

(12) ……遠くで見ておかしがつて居た藍縞の一重袴を穿いた男が、図に乗過ぎて何さんとか呼ばれて振返る途端に、明けかけの障子の親骨へ、したゝか頭を打つけたのもまた奇観であった。(『油地獄』斎藤緑雨 1891)

(13) 十兵衛よもや来はせじと思ひ合うたる職人ども、ちらりほらりと辰の刻ころより来て見てびっくりする途端、精出してくる嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが……(『五重塔』幸田露伴 1891)

(14) ……宙へ引あげるかと思ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずるずると抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。(『たけくらべ』樋口一葉 1892)

「トタン」の前に動詞の〈ル形〉を付けているとき、継起関係と同時関係がある。同時関係には重複の同時性と接触的同時性がある。

例(15)では「縄の結び目へ首を入れる」と「他のものが台を蹴返す」という動作が同時に起こった。例(16)は留めることと鯉の首に触れることはほぼ同時の動作である。例(17)は投げる同時に紐が切れて飛んでいくと理解してよかろう。

(15) 一人が台の上へ登って縄の結び目へ首を入れる途端に他のものが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下りするという趣向である。(『吾輩は猫である』夏目漱石 1905)

(16) しかもその声が少し遅かったので、留める途端に弥三郎の刃はもう鯉の首に触れていた。(『鯉』岡本綺堂 1936)

(17) 涼しさに落着いているのか、とにかく、あわてて逃げ出す様子もなく、見廻りの足で踏みにじられた写図の断片と、そこらに散らばっている反古をひろい集め、次に、相手を投げる途端に紐が切れて飛んで行った編笠を、静かな目で捜している。(『宮本武蔵 04 火の巻』吉川英治 1989)

例(18) 例(19)も同時関係であるが、実は例(15)～例(17)と違う。例(18)では、段梯子をおりているとき、裾が足に絡んだ。例(19)では、動いているとき、隙間から潜り込めた。それで、例(18) 例(19)は重複的同時関係であり、例(15)～例(17)の接触的同時関係と異なる。

(18) さんざんに銀子とやり合った果てに、太々しく席を蹴立てて起ち、段梯子をおりる途端に裾が足に絡み、三段目あたりから転落して、そのまま気絶してしまった。(『縮図』徳田秋声 1969)

(19) 時計の音と共に此の緑盤の動くを見るのは今が二度目だ、此の前にタツた一度しか見た事は無い、何処まで動いて其のあとが何の様になる事か其の辺は少しも知らぬ、けれど動く途端に其の隙間から潜り込めば宜いに違いないと余は唯此の様に思い詰めて居る、午後の一時を打つ時計の音はサア潜り込む合図である。(『幽霊塔』黒岩涙香 1899)

例(20)～例(22)は継起関係の例である。例(20)では、風がフッと吹込んだあ

と、提灯の火が消えたということを言っているので、隔たりが短いがゼロではない。「途端」の後に「すぐ」や「たちまち」のような副詞が使える。例(21)では、廂から飛び下りたあと、庭石に爪付いて倒れることが起る。同じように、例(22)では、ゆらゆらと揺れたかと思うことは死人が墓の中からすうつと立ち上る前に起こったので、この間に「すぐ」「たちまち」が使える。

(20) 或日お客来て御殿の方は混雑致しています時、大藏が長局の塀の外を一人で窺かに廻ってまいりますと、沢山ではありませんが、ちら―と雪が顔へ当り、なか―寒うござります、雪も降止みそうで、風がフッと吹込む途端、提灯の火が消えましたから、大「あゝ困ったもの」と後へ退ると、長局の板塀の外に立って居る人があります。(『菊模様皿山奇談』三遊亭円朝 1927)

(21) 伯父が京都で殺された時は、頭巾を着た人間にどやどやと、旅宿へ踏み込まれて、伯父は二階の廂から飛び下りる途端、庭石に爪付いて倒れる所を上から、容赦なく遣られた為に、顔が膾の様になったそうである。(『それから』夏目漱石 1909)

(22) 一つの墓のうへの十字架がゆらゆらと揺れたかと思ふ途端に、乾からびた死人が、墓の中からすうつと立ち上つたのだ。(『ディカーニカ近郷夜話 後篇03 怖ろしき復讐』ニコライゴーゴリ 1937)

2.3 シタトタン

1920年から1930年まで、「スルトタン」が減っていくとともに、「シタトタン」が増えてきた。「シタトタン」は「スルトタン」と異なり、継続関係しか表わさない。あるいは、前の動作が終わった瞬間、すぐに後の動作が起る。例(23)では、外へ出たあと、用人はよろめいて手を突いたという動作が起る。例(24)では、イギリスの上空にはいったあと、外の景色を見ると、飛行機の下に見える草木の色が変わったということがわかる。

(23) 用人が、槍を持っている男の側を兎のようにくぐって、外へ出たとたん、雪の上に黒い影が現れて、掛け声がかかると、用人はよろめいて手を突いた。(『吉良上野の立場』菊池寛 1988)

(24) イギリスの上空にはいったとたん、飛行機の下に見える草木の色が変わった。フランスの、うすい灰色や真珠色とまじって軽快に爽やかな自然の緑

(『道標』宮本百合子 1948)

「シタトタン」という形式が1900から1910まで、初めて使われてきた。例文の中に次の動詞が出ている。

表3 「トタン」に初めて前接する動詞 (1900-1910)

動詞	思った	倒された	切った	ついた	出しかけた	出した	屈めた	露われた	竣功した
回数	3	1	1	1	1	1	1	1	1

「瞬間動詞+トタン」は、動作が終わった後、次の動作が起こることを表すのに対して、「思う」という動詞は、「継続」という意味を持つので、同じ瞬間に、あるいは同時に起こる意味がある。以下はそれぞれの動詞の例である。

(25) 静かな村！と思った途端、ふと自分の眼に入つたものがある。(『重右衛門の最後』田山花袋 1902)

(26) 講堂は一夜にして風のために倒壊し、再び築いて竣功したとたんに、またしても火災にあって灰となった。忘れられぬ恨みをいだくも、禍の源はなお尽きず、天災がようやく去ったかと思つたのであるが、またしても人災(哲学館事件)が起こつたのだ。(『西航日録』井上円了 1904)

(27) 出しかけた途端に將軍が通つた。(『趣味の遺伝』夏目漱石 1906)

(28) 戸の星を覗こうと、末の娘が真先に驟然と上つて、続いて一人々々、名ある麗人の霊のごとく朦朧として露われた途端に、英臣はかねてその心構えをしたらしい、やにわに衣兜から短銃を出して、衝と早瀬の胸を狙つた。(『婦系図』泉鏡花 1907)

(29) 平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切った途端に、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活上より死に入る作用と名けている。(『坑夫』夏目漱石 1908)

(30) おれは人殺であつたんだと始めて気がついた途端に、背中の子が急に石地藏のように重くなった。(『夢十夜』夏目漱石 1908)

(31) ハッと思つた途端に、私はこの時初めて、我れと我心に帰って、気が付いてみると、そんな砂利の上に、横ざまに倒されている。(『死神』岡崎雪声 1909)

(32) ……最早何処にも見えないので、やれ安心と、ほっと一息付きながら歩

き出した途端、ひやりと頸筋に触れたものがある、また来たかとゾーッとしながら、夢中に手で払ってみる……（『白い蝶』岡田三郎助 1909）

(33) 『何。』と、蠟燭の火を下げて身を屈めた途端に、根太板の上の或物は一匹の白い蛇に成つて、するすると朽ち重つた畳を越えて消え去つた。（『蓬生』謝野寛 1909）

(34) ……二人肩と肩と擦れ寄りながら、自分の家の前まで来て内へ入ろうと思った途端、其処に誰も居ないものが……（『因果』小山内薫 1909）

(35) それから、帰って主人に昨夜の出来事を談すと、主人のいうには「それは屹度お前も矢張昨夜死神につかれたのだが、その倒された途端に、幸と離れたものだろう……（『死神』岡崎雪声 1909）

2.4 シテイルトタン

実は、「シテイルトタン」という形式が使われた場合もあり、ほぼ同時関係である。例文に出てくる動詞は次のようである。

表 4 「トタン」にシテイルのような形式で前接する動詞

動詞	シテイル	言ってる	思ってる	思い惑ってる	辿つてゐる	いいかけてる	考えている
回数	2	1	1	1	1	1	1

工藤真由美 (1995:229) によれば、出来事を〈時間的限界性〉を示差的意味特徴とするアスペクト的観点から、表5のように動詞を分類できる。

表 5 アスペクト的観点からの動詞の分類

A		B	
運動動詞完成相		運動動詞継続相	存在動詞 形容詞 名詞述語
A1 内的限界動詞 完成詞	A2 非内的限界動詞 完成相		

Aの場合は「アクチュアルな時間的限界有」で、Bの場合は「アクチュアルな時間的限界無」である。同時的時間関係の場合には、従属文の述語は、A、Bどちらも可能である。以下の例に、動詞が全部Bに属するが、それぞれの完成相に変

わっても意味が変わらない。「シテイルトタン」は「スルトタン」と同じく同時関係を表わす。

- (36) 今思つてゐる事が役所で取り扱つてゐる書類であつたら、これからその書類の下の方へ、よぢれた草の茎を組合せたやうな字で「スタニスラウス・フォン・キツク」と署名しようとしてゐるとたんのやうに、ナイフは握られてゐるのである。(『祭日』森鷗外 1912)
- (37) 二人が土方の噂をしている途端、「おう——」絶望の叫びで土方は島田のために太刀を打ち落されてたじろぐところを、犬の子を転がすように引き倒され、起き上ろうとした時は、島田の膝は背の上にさながら盤石を置いたようです。(『大菩薩峠』中里介山 1913)
- (38) 孫はどうして降りて来るのでございましょう」そう言つてゐる途端に、どしんという音がして何か空から落ちて来ました。(『梨の実』小山内薫 1918)
- (39) 道を間違えて、やたらに歩き回り、ほんとに迷ってしまったと思つてゐるとたんに、宿屋の前へ出た(ジャン・クリストフ 豊島与志雄 1921)
- (40) ……私も立上ろうかどうしようかと、一寸思い惑つてゐる途端に、乱れた人込の中から不意に、一人の青年が真直に私の方へやって来ました。(『香篋』豊島与志雄 1925)
- (41) 樹立の並んだ静かな校庭に沿ひ乍ら無心に徑を辿つてゐるとたんに読本の斉唱なぞがふと一斉に湧き起る時、不思議な色彩に粉飾された霧のやうな一つの心が……(『竹藪の家』坂口安吾 1931)
- (42) 「そうかもしれない。それでほくは……」と、いいかけてゐるとたん、機関長シリンは急にアッと声をあげた。(『海底大陸』海野十三 1937)
- (43) 河岸ぶちの柳の小枝が垂れ下つてゐるのを見て、夕方、枝が重いか青葉が重いかと、ばかなことを考へてゐるとたんに、一つの眼が柳の中から浮き出してきて、私の方をじっと眺めている。(『憑きもの』豊島与志雄 1949)

2.5 シテイタトタン

「シテイタトタン」は稀にある。青空文庫では、以下の7例しかない。「スルトタン」「シテイルトタン」と同じく同時関係を表す。

- (44) 役目も言わずにそのまま財布を持って立ち去りそうにしますので、私と棟梁が泥棒ッ！ と大声をあげて騒ぎ立てたとたんに、私は、そのお役人がピカリと引っこ抜いたのを見ました。(『丹下左膳』林不忘 1927)
- (45) ころもにそのひとつをちぎりとり歯にあてると、果実の肉がはち切れるほど水気を持っていることとて歯をあてたとたんにぽんと音高く割れ冷い水がほとばしり出て鼻から頬までびしょ濡れにしてしまうほどであった。(『ロマネスク』太宰治 1934)
- (46) 自轉車だな、と聞耳をたてたとたんにもう滑りのいい表戸が開いた。(『過程』島木健作 1935)
- (47) 「あッ——」と声を立てた途端に、杖の灯はパツと消えてしまつて、再び真の闇となった。(『地球盗難』海野十三 1936)
- (48) それからおれはすぐ花籠をつかんで甲板に出て、それを海の中へ捨てたとたんに、どカンと爆発よ。(『爆薬の花籠』海野十三 1940)
- (49) 下の狐は、憤慨してむかつ腹を立てた途端にわれを忘れ、先刻の自制心を失い、裳の間から素早く手を出して上の狐の持っている餅を奪って、股座の奥の横に割れた己の口へ、ねち込んだ。(『わが童心』佐藤垢石 1993)
- (50) 兵馬が燈心を掻き立てた途端のこと、その行燈の下から、ぬっと這い寄った人の面、それとぴったり面を合わせた兵馬が、「あ！」と言いました。(『大菩薩峠』中里介山 1976)

第三章 機能語としての比較と分析

3.1 「瞬間」「アト(ノチ)」との比較

「トタン」のような、ある動作が終わった後、次な動作がすぐに起こるという意味を表わす機能語がたくさんある。「瞬間」と「アト(ノチ)」は「トタン」と同じように、それぞれスルとシタが前接する用法がある。「瞬間」が同時の意味を表し、「トタン」「アト(ノチ)」を継起を表わす。

『日本国語大辞典』では、「瞬間」の意味について、瞬間[名]まぶたを動かす間。まばたきをするひま。ごく短い時間をいう。瞬時。刹那。と記してある。このように、「瞬間」が時間的同時性の強い語であることで、トタンとは違う。「シタ瞬間」の用法は以下のように二つある(三次佑果 2016)。

- a. 継起性ではなく同時性を表すと言えるもので、前件と後件が極めて瞬時に「ゼロ秒差」でおきる、前件に加えて後件が新たに生じるというような点に重きが置かれる。
- b. 基本的に時間上のみでの接続機能が中心であるため、前件後件間の意味的関連性の有無は関係ない。

現代日本語では、「シタ瞬間」しかないが明治時代に「スル瞬間」の形式もある。「トタン」のように、「スル瞬間」から「シタ瞬間」への変遷が見られる。

(56) なぜというと新井田氏ははいってきた瞬間に、その眼は思わず鋭くなって、奥さんが良人をどういう態度で迎えるかを観察するのを忘れなかったからだ。(『星座』有島武郎 1922)

(57) 高価の大辞典を瀕死の間際に買うというのは世間に余り聞かない咄で、著述家としての尊い心持を最後の息を引取る瞬間までも忘れなかった紅葉の最後の逸事として後世に伝うるを値いしておく。(『硯友社の勃興と道程』内田魯庵 1916)

ノチ(二)はアト(デ)と同義であり、文章語である近代においては、「シタノチ」という形のみならず「スルノチ」のような形もある。そして、現代日本語において、「シタアト(ノチ)」のような形式になっている。「ノチ(アト)」は「トタン」「瞬間」と同じように、「スルアト(ノチ)」から「シタアト(ノチ)」へ変遷した。ここで例を四つ挙げておく。

(58) その後、お美代さんの容態はどうか」書記は大きな手でツルリと自分の顔を撫でまわしたのち、「ああ、お美代坊は、いま睡り薬が利いて、ぐうぐう眠っとなりますだ。(『地球盗難』海野十三 1936)

(59) 尊き叟よ、われら亦同じく食を思ふべし、終りて後ちにイリオンに屍體携へ歸るのち、汝愛兒を哭すべし、涕その時多からむ。(『イーリアス』土井晩翠 1940)

(60) 葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。(『草枕』夏目漱石 1906)

(61) わたしのそこを去ったあと、それまでの際物問屋、漬物屋、砂糖屋、その外一、二けんを買潰して出来たのがその銀行である。(『雷門以北』久保田万太郎 1927)

3.2 「かと思うと」「や否や」との比較

時を表わす機能語のうち、「かと思うと」「や否や」が「トタン」と同じ、「するとすぐに」「するとたちまち」という意味を表わす。表6は機能語の「トタン」「かと思うと」「や否や」の使用頻度の変化を示すものである（毛文偉2010）。

表6 機能語の「トタン」「かと思うと」「や否や」の使用頻度の変化

（単位：百万字）

	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990
トタン	16.3 ⁽²⁾	5.2	2.8	10.3	29.7	13.5	20.4	15.2	19.3	44.8
かと思うと	60.7	33.1	40.1	24.8	39.1	16.5	13.2	11.4	8.2	9.5
や否や	21.3	30.6	11.9	2.1	1.6	4.7	5	3.7	2	4.5

図2は機能語として「トタン」「かと思うと」「や否や」の使用頻度の変化を示すものである。

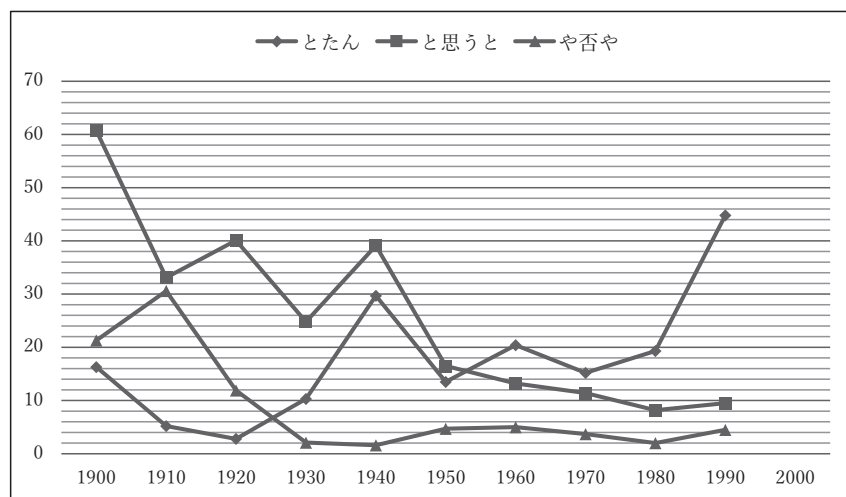


図2 機能語として「トタン」「かと思うと」「や否や」の使用頻度の変化

(2) この部分はインターネットで計算したデータである。毛文偉 (2007a)

「トタン」に前接する動詞は意識動詞の場合も無意識動詞の場合もある。しかし主文の動詞は全部無意識動詞である。(30)は意志動詞の場合で、(62)は無意識動詞の場合である。

(30) おれは人殺であったんだと始めて気がついた途端に、背中の子が急に石地蔵のように重くなった。(『夢十夜』夏目漱石 1971)

(62) 手紙が来なくなるとたん、ジェンはがっくりと落ちこんだ。(『プレイボーイの結婚』矢部真理 2005)

「シタトタン」の前件と後件の主語が違う可能性がある。(63)の主文と従属文の主語が同じで、(64)の主文と従属文の主語は違うのである。

(63) 考えたとたん、ロープのことを思い出した。(『マイがいた夏』マッツ・ウォール 2004)

(64) 玄関のお呼び鈴が鳴ったとたん、わたしは気を付けの姿勢をとった。(『ダラ』パトリック・ベッソン 1992)

「かと思うと」の用法は二つある。連続的な意識動詞の場合と連続的な無意識動詞の場合である。(65)と(66)は連続的な無意識動詞の場合で、(65)では、主文と従属文の主語は違い、(66)では、主文と従属文の主語が同じである。(67)は連続的な意識動詞の場合で、主文と従属文の主語が同じである。

(65) 太陽の輝く日が何日か続いたかと思うと、またあ雨が降った。(『長い冬』ローラ・インガルス・ワイルダー 1988)

(66) 晝は一瞬前かがみになったかと思うと、スローモーションのように後方へ倒れた。(『帝国ホテルが教えてくれたこと』竹谷年子 1999)

(67) そして不思議そうな顔をしたかと思うと、胸元に目をやって、ずれて開いていた襟を慌てて直した。(『四日間の奇蹟』浅倉卓弥 2004)

現代日本語において、「や否や」の用法は基本的に、連続的な意識動詞をつないで、主文と従属文の主語が同じである。

(68) ところがこの言葉を聞かや否や、わたしは思わず泣いてしまった。(『道ありき』三浦綾子 2002)

3.3 まとめ

時間関係を表わす「トタン」の用法は「スルトタン」から、「シタトタン」へ変遷した。「トタン」に似る機能語が二つがある。「瞬間」「アト(ノチ)」に前接する動

詞も「スル」から「シタ」へ変遷した。三者には共同点がある。また、「トタン」は「かと思うと」「や否や」と同じく、「するとすぐに」、短い時間に連続的な動作が起こるという意味を表わす。でも表7でまとめているように、主文と従属文における動詞の意識性と主語の一致性がそれぞれ異なる。

表7 主文と従属文における動詞の意識性と主語の一致性

	主文	従属文	主語
トタン	無意識	無意識	同&異
		意識	同&異
かと思うと	意識	意識	同
	無意識	無意識	同&異
や否や	意識	意識	同

おわりに

本論文は「トタン」の用法や歴史変遷を研究した。「スルトタン」「シタトタン」だけではなく、「シテイルタン」と「シテイタトタン」の形式もある。「シタトタン」は1900年と1910年の間に現れた。1920年以降、「スルトタン」の使用比率は減少し、1980年からなくなった。「シタトタン」の使用比率は1920年からだんだん増えてきた。1960年以降、基本的に「シタトタン」だけである。時間関係の区別としては、「スルトタン」は接触的同時性、重複的同時性と継起関係を表わすのに対して、「シタトタン」は継起関係しか表さない。

「トタン」と同じような変遷ルートを辿った機能語はほかに「瞬間」「アト（ノチ）」があり、前接する動詞のがスルからシタへ変遷した。「と思うと」「や否や」は「トタン」と同じように、「するとすぐに」「するとたちまち」という意味を表わすが、相違点がある。動詞の意志性と、主文と従属文の主語の特徴が違う。

「トタン」「瞬間」「アト（ノチ）」に前接する動詞のテンス形式がなぜ変わったのかまだ不明である。これはこれからの研究問題である。

参考文献

- [1] 奥村大志. 時を表す機能語―「たとたんに」「かと思うと」「やいなや」「～が～ないかのうち

- に」「が早いか」の意味・特徴の検討。『実践女子短期大学紀要』, 2006年27号。
- [2] 工藤真由美. 現代日本語の時間の従属複文。『横浜国立大学人文紀要第二類語学・文学』, 1992年39号。
- [3] 工藤真由美. 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現』, ひつじ書房, 1995。
- [4] 工藤真由美. 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』, ひつじ書房, 2014。
- [5] 砂川有里子. 複合助詞について。『日本語教育』, 1987年62号。
- [6] 三次佑果. 時間的近接関係をあらわす接続機能語の分類—「とたん」「瞬間」「やいなや」。『学習院大学大学院日本語文学』, 2016年12号。
- [7] 田島優. 「〈ル形〉+途端」から「〈タ形〉+途端」へ。『説林』, 2001年49号。
- [8] 中村重穂. 「～なり」と「～たとたん」に関する一考察——意味論的観点から——。『北海道大学留学生センター紀要』, 2005年9号。
- [9] 日本語記述文法研究会. 『現代日本語の文法3』, くろしお, 2007。
- [10] 村木新次郎. 〈とき〉をあらわす従属接続詞——「途端(に)」「拍子に」「やさき(に)」などを例として——。『同志社女子大学学術研究年報』, 2005年第56巻。
- [11] ハディウトモ ドウイ アンゴロ. 近接関係の時間表現の研究——「とたん(に)」「やいなや」「はずみ(に/で)」「拍子に」を中心に。『立教大学日本語研究』, 2013年20号。
- [12] 毛文伟. 基于语料库的历史语言学 research——以对瞬间继起机能辞的考察为例。《日语学习与研究》, 2010, (4), 87-91。
- [13] 毛文伟. 《现代日语助词性机能辞的研究》, 上海外国语大学出版社, 2010。
- [14] 毛文伟. 《再论语料库研究的信度问题》, 《日语学习与研究》, 2007, (4), 87-91。
- [15] 青空文庫
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?%C1%B4%CA%B8%B8%A1%BA%F7%A5%B7%A5%B9%A5%C6%A5%E0%A1%D8%A4%D2%A4%DE%A4%EF%A4%EA%A1%D9%2F%A5%C0%A5%A6%A5%F3%A5%ED%A1%BC%A5%C9%2F%A1%D8%C0%C4%B6%F5%CA%B8%B8%CB%A1%D9%A5%D1%A5%C3%A5%B1%A1%BC%A5%B8>
- [16] BCCWJ「現代日本語書き言葉均衡コーパス」
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>